

## 令和4年度研究開発実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

高度に競争的でグローバル化された多様性社会に適応するために求められる、3つの次元（躍動する感性・レジリエンス・横断的な知識）の基礎となる資質・能力を育成する幼小中一貫教育カリキュラムの研究開発

### 2 研究開発の概要

新領域「光輝（かがやき）」を中心とした、幼小中一貫教育カリキュラム開発を行う。

主に①道徳・特別活動・総合的な学習の時間の全時数と各教科時数の4分の1程度を上限に含んだ新領域「光輝（かがやき）」に、メタ学習理論やブレークスルー思考を取り入れた単元を開発し、保育・各教科とも関連させ、3つの次元の基礎となる資質・能力を育成する実践②「光輝（かがやき）視点の保育」や新領域「光輝（かがやき）」を中心として3つの次元の基礎となる資質・能力を育成③幼小接続期では、3つの次元の基礎となる資質・能力を育成する三原版幼小接続カリキュラムの開発。

検証は、3つの次元の基礎となる資質・能力の育成状況、及び実施単元やカリキュラムの効果の分析と評価をし、運営指導委員会等による外部評価も行う。これらを踏まえ、高度に競争的でグローバル化された多様性社会に適応するために求められる資質・能力を育成するカリキュラムの提言を行う。

### 3 研究の目的と仮説等

前研究開発の実践を通して、子どもたちに資質・能力が身に付いた姿も見られ、カリキュラム開発としても一定の成果があったと思われるが、これからの社会の情勢と本学校園の子どもたちの姿を照らし合わせた時、いくつかの課題も明確となった。上手くいかなかったり友達と思いが通じ合わなかったりすると、すぐに諦めてしまう姿が見られた。また、学習や行事においては、ある程度の結果を出すことはできるが、前例がないことに取り組む時や活動の見通しがもてない時は、二の足を踏んだり、自分たちの力で対応することができなかつたりする姿も見られた。このような本学校園の子どもたちの課題を克服していくことは、多様性社会に柔軟に対応していける人材を育成することにつながるのではないかと考え、育成すべき資質・能力について検討した。それらを様々な視点で分析・整理し、3つのまとまりを得た。これらのまとまりを「次元」と称することとし、それぞれ躍動する感性、レジリエンス、横断的な知識と名付けた。これら3つの次元の基礎となる資質・能力を育成することで、多様性社会を生き抜くために生きて働く力が子どもに備わると考えられる。そこで、新領域「光輝（かがやき）」や「光輝（かがやき）視点の保育」を軸に、12年間の幼小中一貫教育カリキュラムの開発・実践を通して、これからの高度で競争的なグローバル化された多様性社会に適応するために求められる、3つの次元の基礎となる資質・能力を子どもたちに育てていくカリキュラムの開発と提言を行う。

#### （1）研究仮説

道徳・特別活動・総合的な学習の時間の全ての時数と各教科の4分の1程度を上限に関連させた新領域「光輝（かがやき）」でメタ学習を通して行う幼小中一貫教育カリキュラムを開発、実践することにより、多様性社会に適応することにつながる3つの次元（躍動する感性・レジリエンス・横断的な知識）の基礎となる資質・能力を育成することができるであろう。

#### （2）教育課程の特例

①幼稚園においては、変更なし。

②小学校においては、全学年に新領域「光輝（かがやき）」を新設する。年間実施時数は、第1学年102時間、第2学年105時間、第3～6学年140時間とする。また、全学年の道徳の時間を「光輝（かがやき）」に包摂し（第1学年は34時間、第2～6学年は35時間）、全学年の特別活動も「光輝（かがやき）」に包摂（第1学年は34時間、第2～6学年は35時間）する。第3～6学年の総合的な学習の時間は実施せず、標準実施時数70時間を「光輝（かがやき）」に配当し、第1学年34時間、第2学年35時間の学校裁量時間も「光輝（かがやき）」に配当する。更に、全学年の各教科の4分の1程度を上限に「光輝（かがやき）」と関連させて行う。

③中学校においては、全学年に新領域「光輝（かがやき）」を新設する。年間実施時数は第7学年

120時間、第8・9学年140時間とする。また、全学年の道徳の時間を「光輝（かがやき）」に包摂し（年35時間）、全学年の特別活動も「光輝（かがやき）」に包摂（年35時間）する。総合的な学習の時間は実施せず、年間標準実施時数（第7学年50時間、第8・9学年70時間）を「光輝（かがやき）」に配当する。更に全学年の各教科の4分の1程度を上限に「光輝（かがやき）」と関連させて行う。

## 4 研究内容

### (1) 教育課程の内容

#### ① 育てたい3つの次元の基礎となる資質・能力について（中学校卒業時の姿）

##### 【躍動する感性について】

人間味溢れる豊かな感覚を高め、前向きな価値観に基づき行動しようとする	
人間味溢れる豊かな感覚	未知なものや自分とは異なる考え方に興味・関心をもつ。
自ら学ぼうとする姿勢	学ぶことに對し、自分で価値を見いだし、意欲的に打ち込む。

##### 【レジリエンスについて】

逆境にさらされても適応し、目標を達成するために再起すること	
粘り強く取り組む力	困難な状況においても挑戦し続けることができる。
コラボレーションする力	公正な態度をもって、価値観の異なる他者と協働することができる。
複眼的に思考する力	1つの出来事や事実を多くの異なる視点から違う見方をすることができる。

※さらに「乗り越える強さ」と「乗り越えられない時の対応力」の2つのとらえを補足した。

##### 【横断的な知識について】

習得した知識を実生活等において活用すること	
知識と知識を関連付けながら深く追究する力	学習したことと学習していることを関連させて考え方を広げ、どこまでも深く調べて明らかにしようとする。
論理的に問題を解決する力	根拠に基づき、筋道を立てて考え、問題を解決することができる。

#### ② 新領域「光輝（かがやき）」及び「光輝（かがやき）視点の保育」の活動の実施と単元開発・カリキュラム開発

##### (ア) 幼小中の「発達と接続」を意識した学年区分の設置

学年区分は、「小1プロブレム」、「中1ギャップ」や「就学前教育と義務教育との接続」等の現学校教育での課題を踏まえ、12年間における幼小中の接続期を意識した、「幼小接続期（年少・年中・年長・1年・2年）」、「転換期（3年・4年）」、「小中接続期（5年・6年・7年）」、「義務教育完成期（8年・9年）」の4つを構成した。この学年区分に従って新領域「光輝（かがやき）」及び「光輝（かがやき）視点の保育」と「保育・各教科」にまたがる「教育活動全般のカリキュラムの開発」を行う。

##### (イ) 新領域「光輝（かがやき）」の単元開発・カリキュラム開発

小・中学校においては、新領域「光輝（かがやき）」を設置し、重点的に育成する3つの次元の基礎となる資質・能力の育成をめざす学習単元を開発する。具体的には、行事を中心とした単元や、行事と教科を関連させた単元、教科を中心として合科的、横断的な単元を開発する。また、新領域「光輝（かがやき）」に道徳、特別活動を組み込み、「道徳的なことや行為の在り方」を考えたり、「自治」を学んだりすることのできる単元を開発する。その際、全ての単元開発に当たって、本校園のもつ人的リソース（教師・保護者・大学関係者・卒業生・地域の方々等）を積極的に活用する。これら新領域「光輝（かがやき）」を中心とし、各学年区分の特徴を生かしたカリキュラムの開発に取り組む。

##### (ウ) 「光輝（かがやき）視点の保育」の活動の実施と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に視点をあてた3つの次元の基礎となる資質・能力を育む幼小接続カリキュラムの開発

幼稚園においては、幼稚園教育要領に定められた5つの領域をもとに、3つの次元の基礎となる資質・能力を育む「光輝（かがやき）視点の保育」の実践し、各学年ごとに育みたい資質・能力に対する教師の環境援助についてまとめ、「光輝（かがやき）視点の保育」のカリキュラムを作成した。また、実践を行う中でカリキュラムの修正・改善に取り組む。さらに、そのカリキュラムをもとに年長児と小学校1年生を中心に、幼稚園教育要領で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に視点をあて、3つの次元の基礎となる資質・能力を育む三原版幼小接続カリキュラムを開発する。幼稚園と小学校の教員が、接続期の子どもの姿を共有することや幼稚園と小学校で大切にしていることについて話し合うことを通して、3つの次元の基礎となる資質・能力の幼児期から児童期への発達の流れや教師の援助を明確化し、三原版幼小接続カリキュラムを作成する。

## (2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<p>本研究におけるめざす子どもの姿の設定と「3つの次元とその基礎となる資質・能力系統表」の作成。教科学習と新領域「光輝（かがやき）」及び「光輝（かがやき）視点の保育」からなる幼小中一貫教育カリキュラムの作成準備</p> <p>①研究構想案の作成及び、中学校卒業時にめざす3つの次元の基礎となる資質・能力が育った子どもの姿の設定</p> <p>②3つの次元の基礎となる資質・能力の具体化・焦点化</p> <p>③めざす子どもの姿につながる学年区分別の「3つの次元とその基礎となる資質・能力系統表」の作成及び、メタ学習にかかわる単元・活動及び教材指導法を開発、試行。開発した単元・活動を試行することを通じた研究内容や方法における課題の分析、次年度の方向性の明確化</p> <p>④公開研究会を通じた本学校園の取組を提案発表、協議での成果と課題の検証</p> <p>⑤「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に視点を当て、3つの次元の基礎となる資質・能力を育む三原版幼小接続カリキュラムの作成に向けた、幼小の教員間での協議</p> <p>⑥明らかになった初年度の成果と課題をもとにした、次年度の研究構想案の修正。幼小中一貫教育カリキュラムの試案の作成</p> <p>⑦先行研究の調査及び、研究に取り組む上での研究内容について教員間で共有</p>
第2年次	<p>第1年次の成果と課題に基づき、3つの次元の基礎となる資質・能力を育成するための指導と評価の在り方について開発・実践の推進、及び成果と課題の検証</p> <p>①前年度作成したカリキュラムをもとにした、幼小中一貫教育カリキュラムの試案の作成。設定しためざす子どもの姿の育成や学年区分別の目標につながる活動・単元及び教材、指導法、評価方法の開発。更に実践を通して成果と課題の検証</p> <p>②公開研究会を通じた本学校園の取組の提案発表、協議での成果と課題の検証</p> <p>③「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に視点をあて、3つの次元の基礎となる資質・能力を育む三原版幼小接続カリキュラムの試案作成及び、活動・単元の開発</p> <p>④研究の柱である3つの次元（「躍動する感性」「レジリエンス」「横断的な知識」と、新学習指導要領の3つの柱（「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）の関係性の整理</p> <p>⑤第2年次の成果と課題をもとにした、次年度の研究構想案や幼小中一貫教育カリキュラムの改善</p>
	<p>※令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響拡大を考慮し、名目指定とした。</p> <p>研究内容は、1・2年次の内容を踏襲し、継続的に研究に取り組んだ。</p>
第3年次	<p>第2年次の成果と課題を踏まえ、幼小中一貫教育カリキュラムを実施するとともに、実践を通して成果と課題を検証し、最終年度への改善</p> <p>①前年度作成した幼小中一貫教育カリキュラムを通年実施し、めざす子どもの姿の育成や学年区分別の目標につながる活動・単元を実践</p> <p>②公開研究会を通して、本学校園の取組を提案発表し、成果と課題を検証。また、最終年度に向けた研究内容や方法を改善</p> <p>③前年度作成した3つの次元の基礎となる資質・能力を育む三原版幼小接続カリキュラムを実施し、目標につながる活動・単元を実践</p> <p>④研究の柱である3つの次元（「躍動する感性」「レジリエンス」「横断的な知識」と、新学習指導要領の3つの柱（「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）の関係性を、異同も踏まえ教科の本質に迫り及び、教科目標や教科内容、学習評価方法の観点から具体的に整理</p> <p>⑤明らかになった第3年次の成果と課題をもとに、次年度の研究構想案を修正するとともに、幼小中一貫教育カリキュラムを改善</p>
第4年次	<p>第3年次の成果と課題を踏まえ、幼小中一貫教育カリキュラムを完全実施し、実践内容の改善を図りながらカリキュラムの総括と研究の成果と課題をまとめる。</p> <p>①めざす子どもの姿に向かうために構成した幼小中一貫教育カリキュラムと新領域「光輝（かがやき）」及び「光輝（かがやき）視点の保育」における各学年の目標や単元・活動の内容等のまとめ</p> <p>②公開研究会の開催において本学校園の取組について提案発表を行い、これまでの成果と課題を明らかにする。</p> <p>③3つの次元の基礎となる資質・能力を育む三原版幼小接続カリキュラムを実施するとともに完成</p> <p>④明らかになった成果と課題と総括した内容をもとに、最終年度の研究報告書を作成</p>

## (3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<p>幼小中一貫教育カリキュラムを作成する上での研究内容や方法について分析、検討及び、研究構想の課題の明確化とめざす子どもの姿の育成につながる単元・活動を試行実施したことによる効果測定</p> <p>①「3つの次元とその基礎となる資質・能力系統表」の作成。これに基づいて構想した、単元レベルの具体的な姿をもとにした児童・生徒の評価の実施。幼児期のエピソード記録に基づく評価の実施</p> <p>②一般学力調査や全国学力・学習状況調査から、狭義の学力に関する分析</p> <p>③内部評価として新領域「光輝（かがやき）」及び「光輝（かがやき）視点の保育」の活動や単元を開発・試行したことによる教員対象の質問紙調査</p> <p>④外部評価として運営指導委員会での研究協議をもとに、幼小中一貫教育カリキュラム作成上の課題と改善方法について検討。また、保護者を対象とした質問紙調査の実施</p>
第2年次	<p>第1年次に作成した幼小中一貫新カリキュラムの試案を通年実施し、研究内容や方法について効果の検証の実施</p> <p>①児童・生徒の意識変容を見取る質問紙調査の実施</p> <p>②3つの次元の基礎となる資質・能力に関する指標（めざす子どもの姿）の作成。その指標に基づいた児童・生徒のパフォーマンス評価を実施。また、開発した活動の中での幼児のエピソードを記録し、3つの次元の基礎となる資質・能力の育成状況の考察</p> <p>③一般学力調査や全国学力・学習状況調査から、狭義の学力に関する分析を行えるかどうかの検討及び、幼小中一貫教育カリキュラムの改善</p> <p>④年度末に保護者、教員を対象に質問紙調査の実施及び、幼小中一貫教育カリキュラムの試案を実施したことによる成果と課題の明確化</p> <p>⑤内部評価として新領域「光輝（かがやき）」と教科（教科内容の特性も含む）の親和性を測る検証の実施</p> <p>⑥外部評価として運営指導委員会での研究協議をもとに、幼小中一貫教育カリキュラム作成上の課題と改善方法について検討。また、保護者を対象とした質問紙調査の実施</p>



	<p>※令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響拡大を考慮し、名目指定とした。 研究内容は、1・2年次の内容を踏襲しており、評価についても継続的に実施し、データの蓄積等を行った。</p>
第三年次	<p>第2年次に改善した幼小中一貫教育カリキュラムを通年実施したこと、研究内容や方法について効果の検証の実施</p> <p>①児童・生徒の意識変容の測定を継続実施</p> <p>②3つの次元の基礎となる資質・能力に関する指標を改善し、その指標に基づき、児童・生徒にはパフォーマンス評価を継続実施。また、開発した活動や単元の中での子どものエピソードも記録し、3つの次元の基礎となる資質・能力の育成状況を考察し、三原版幼小接続カリキュラムの開発を作成</p> <p>③第2年次及び第3年次の一般学力調査や全国学力・学習状況調査の結果の推移を分析することにより幼小中一貫教育カリキュラムの成果と課題を分析</p> <p>④「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に視点をあて、3つの次元の基礎となる資質・能力を育む三原版幼小接続カリキュラムを開発・活用したことによる成果と課題を明確化</p> <p>⑤年度末に保護者、教員を対象に質問紙調査を行い、改善した幼小中一貫教育カリキュラムを通年実施したことによる成果と課題を明確化</p> <p>⑥内部評価として新領域「光輝（かがやき）」と教科（教科内容の特性も含む）の親和性を測る評価活動を行い、教科と新領域「光輝（かがやき）」の関係性を明らかにし、実施時数を検討</p> <p>⑦外部評価として運営指導委員会において研究協議を行い幼小中一貫教育カリキュラムの成果と課題を検討。また、保護者を対象とした質問紙調査の実施</p>
第四年次	<p>第3年次までに開発した幼小中一貫教育カリキュラムの実施とその効果を検証し、研究内容や方法についての総括</p> <p>①新領域「光輝（かがやき）」と「光輝（かがやき）視点の保育」について、これまで作成してきた単元や活動例に基づき、より効果的な実践をカリキュラムとして提案できるように体系的に整理。また、開発や実践に至った経緯を示すことで具体的なカリキュラム・マネジメントの方策を提案</p> <p>②3年次に改善した評価方法に基づき、園児にはエピソード評価、児童・生徒にはパフォーマンス評価を継続実施する。加えて、第3年次実施の質問紙調査についても継続実施。それらをもとに、3つの次元の基礎となる資質・能力の育成状況を考察。また、開発した幼小接続カリキュラムの修正。さらに、質問紙調査に外部指標の結果との比較を行うことで、本学校園で取り組んでいるアンケート結果の妥当性についての検証</p> <p>③一般学力調査や全国学力・学習状況調査の結果の推移を分析したり、内部・外部評価など様々な視点から分析をしたりして、研究開発の総括</p> <p>④「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に視点をあて、3つの次元の基礎となる資質・能力を育む三原版幼小接続カリキュラムを開発・活用したことによる効果の総括</p> <p>⑤多様性社会に適応するために求められる3つの次元の基礎となる資質・能力が育まれているかを検証するため、卒業生などの人的リソースを生かしたカリキュラムの効果測定を実施。具体的には、本学校園卒業生、近隣公立学校園、保護者から客観的評価を受け、その効果と課題を明示</p>

## 5 研究開発の成果

### (1) 実施による効果

#### ①教育課程の内容は適切であったか

本研究開発では、「資質・能力系統表」を作成し、全学年で「めざす子どもの姿」を定めた上で研究を進めている。各部会で特徴的な取組の一例と、その取組の結果として、成果と課題を「資質・能力系統表」に照らした子どもの姿で示す（表1）。

表1【新領域「光輝（かがやき）」の特徴的な取組とそれにかかわる子どもたちの姿】（○成果 ●課題）

幼小接続期 部会 【1年生】	取組 の 特徴	「ペアさんとなかよし～子どもの思いや願いを大切に～」では、ペアさんと仲良くなりたいという子どもたちから出てきた思いをもとに、どうしたら仲良くなれるのか、一人一人作戦を考えていった。ペアさんと仲良くなれたと達成感をもった後は、「5年生さんと仲良くなりたい」という思いが生まれ、今度は友達と話し合いながら、実現に向けて取り組んだ。
		<p>○ 初めからペアさんと仲良くなろうと働きかけるのではなく、子どもたちが自然に「ペアさんに会いたい」「ペアさんともっと仲良くなりたい」という思いをもった所で、交流する時間をつくったことで、一人一人が自分事として主体的にペアさんとかかわっていきとすることができた。また、ペアという少人数から学年全体へとかかわろうとする場を設けたことで、1年生同士のかかわりも増え、実現に向けて友達と協力しながら取り組む姿が見られた。</p> <p>● レジリエンスに関する視点では課題が残った。思いや考えが少しずつ異なる中で、どのように自分の意見を伝え、どう折り合いをつけていくのかという視点での話し合いを「光輝（かがやき）」の時間だけでなく、他教科でも小集団で話し合う場を作り、友達の考えを受け止めたり取り入れたりする経験ができるようにすることにも取り組む。</p>
転換期部会 【3年生】	取組 の 特徴	「わくわくみっさまつり」では、「楽しいことをして仲を深めたい」という子どもの思いや願いと「学習の対象を身の回りの環境から地域社会へと広げ、自己の在り方を考えたり人間関係を広げたりしてほしい」という教師の意図を融合させ、社会科の地域学習と関連させたプロジェクトを展開した。
		<p>○ 子どもは、「光輝（かがやき）」で付けたい力を自分で設定して活動に取り組み、単元後の振り返りの場でそれぞれの力の伸びを数値化して自己評価した。数値化することで、自身の学びをメタ認知的にとらえ、「チームの友達と協力し何度も取り組んだのであきらめない力が付いた」と述べるなど、達成感や自分たちの成長を感じたり、友達の新たな一面を発見したりすることができた。</p> <p>● 課題設定時に、子どもの思いや願いと教師の意図の融合にかなりの時間を要した。限られた時間の中でどのように軽重を付けるか、教師が見通しをもってカリキュラム・マネジメントを行う必要がある。</p>

小中接続期 部会 【5年生】	取組の 特徴	「ペアさん安心安全絆プロジェクト」において、ペアさんの思いを大切にしながら、安心して学校生活を送ることができるように、協働しながら活動を行った。その中で、特に「相手意識をもつこと」、「見通しをもつこと」を高めることをめざした。
<p>○ チームで1年生のペアさんが楽しめる遊びを企画する際に起きた問題をもとに、「本当にペアさんは喜んでくれるかな」という道徳資料を作成し、授業を行った。その結果、各チームの問題に向き合い、それまでより一層自分事として、よりよい人間関係が形成できるよう企画を改善することができた。</p> <p>● 子どもたちは目的をもって取り組んでいたものの、目的意識の共有にズレがあり、「ペアさんを笑顔にしたい」子どもと、「ペアさんもだけど、さわやか班全員を笑顔にしたい」子どもがいるなど、意見のすれ違いが起こり、子どもたちにとって納得感のある終わり方ができなかった。目的意識を擦り合わせることを丁寧に行う必要がある。</p>		
義務教育 完成期部会 【9年生】	取組の 特徴	令和4年度の9年生は「大志を抱け」をテーマとして、各自が問いを見つけ、解決していく個人探究学習に取り組む中で、課題設定時の充実と共に、他者との対話を通して、自分自身のこれからの生き方を考える学びとした。
<p>○ 個人探究学習において、現状の把握をもとに探究課題を設定する活動を行うことで、自分の好きなことや興味を中心とした取組から、テレビや新聞などの情報や先生からのアドバイスなど、自分以外の意見や他の資料にも目を向けられるようになった。こうして探究学習をより広く・より深くとらえられるようになり、「自分のテーマが誰かのため、社会のために役立つ」「探究学習に取り組む価値の実感」といった視点での深まりも見られた。</p> <p>● 「光輝（かがやき）」における、これまでのアンケートの継時変化や推移から、困難があつてそれを乗り越えたとき、教師の問いかけやアドバイスだったのか、本人自身の努力だったのか、友達からの支援だったのか、その手立てやきっかけを導出し、今後の指導に役立てたい。</p>		

全ての学年区分で、「資質・能力系統表」の姿と照らし合わせると、成果と見られる子どもの姿が現れており、教育課程の内容はおおむね適切であると考えられる。一方で、一部課題と見られた点については、本学校園で整理をしている「多様性社会における構成概念と発達に応じた保育・各教科等で育む力との関連表」の中で、関連性を整理しながら改善の視点としてカリキュラム・マネジメントに反映していきたい。

## ②指導方法・教材等

### (ア)実施した指導方法等の特徴

指導の充実を図るための令和4年度の各区分の重点取組は次の通りである。

幼小接続期部会	① 「三原版幼小接続カリキュラム」の完成 ② 幼小接続期における効果的な評価の在り方を明らかにすること ③ 転換期との接続の在り方について明らかにすること
転換期部会	① 自己肯定感をもちにくくなるという転換期の発達課題を乗り越えさせること ② 具体と抽象を往還させる振り返り ③ 幼小接続期から小中接続期への系統性 ④ 転換期としての象徴的な単元モデルの開発
小中接続期部会	① 子どもの学びと教師の働きかけの系統性 ② 異校種・異学年交流 ③ 教師間連携の強化
義務教育 完成期部会	① ルーブリックを活用した個人探究学習における指導の充実 ② 道徳、特別活動、教科指導と深くかかわる単元や授業の創出 ③ 社会で生きて働く資質・能力の育成

### (イ)指導方法等は適切であったか

本学校園における研究開発の授業時間等の特徴として、総合的な学習の時間を実施せず、道徳の時間と特別活動の全ての時間の包摂と教科の1/4を上限とした時間を関連実施して新領域「光輝（かがやき）」の時間を設置したところにある。それらの効果を検証する為、以下のような取組を行った。

道徳・特別活動	①アンケート調査を行い、全体の資質・能力の向上が見られたのかを検証する ②「光輝（かがやき）」単元前後での子どもの変容を見取る（各学年子どもの変容シート作成）
各教科との関連 について	①方法関連・内容関連の2点をもとに「光輝（かがやき）」と各教科の関連についてを検証シートを用いて整理・検証する

ここでは、道徳と特別活動を包摂、教科の1/4を関連実施したことについての効果について述べる。

### (ウ)道徳・特別活動の時間を包摂したことの成果(○)と課題(●)

特別活動について、特別活動の3つの視点（人間関係形成、社会参画、自己実現）と新領域「光輝（かがやき）」での学習内容（3つの次元）を子どもたちが意図して学んでいるか、という視点で小学生・中学生を対象にアンケート調査（4件法）を実施した。また、道徳については、各学年で取り上げた道徳の内容項目が3つの次元との関連をどのように示すかという視点で、こちらも小学生・中学生を対象としたアンケート調査（4件法）を実施した。例えば、6年生に実施したアンケートは次のような内容であった。そのアンケート結果の肯定的回答率をそれぞれ、表2、3に示す。

- ・附属オリンピックの活動を計画していく中で、自分のアイデアを発信し、よりよい活動にしようと取り組むことで、様々な問題に対して意欲的に取り組むことができた。【社会参画・躍動する感性】
- ・附属オリンピックの活動の中で、どのような運動会であれば、自分たちのつくりたい運動会になるか考えたり、どのような心構えでプロジェクトに取り組んでいかを考えたことで、自分たちが取り組んでいることの価値を自覚しながら活動することができた。【道徳 D22 誇りある生き方・躍動する感性】

表2 特別活動アンケート肯定的回答率(%)

	4年		5年		6年		7年		8年		9年	
	R3	R4	R3	R4	R3	R4	R3	R4	R3	R4	R3	R4
躍動する感性	98.2	92.8	94.9	96.6	91.2	96.4	96.1	100	100	92.2	100	98.5
レジリエンス	92.8	90.9	100	95.0	96.5	94.7	97.4	100	98.3	96.1	96.1	98.5
横断的な知識	96.4	89.1	89.9	96.6	87.7	91.0	96.1	100	100	88.4	96.1	95.5

表3 道徳アンケート肯定的回答率(%)

	4年	5年	6年	7年	8年	9年
躍動する感性	94.6		96.4		92.3	97.0
レジリエンス		93.0		100.0		
横断的な知識	今年度は調査実施なし					

○ 特別活動アンケートでは、今年度もどの学年も肯定的回答が9割程度であり、3つの次元が高まっていると推察される(表2)。道徳のアンケートでも、肯定的回答が、どの学年も9割を超える結果となった(表3)。また、道徳のアンケートでは、3つの次元とかかわりが深いものを一つ選んで実施したが、多くの学年が3つの次元の中でも、「躍動する感性」の関連が深く、高まったと答えた。

本調査は、夏休み前に実施を行い、その結果については教職員で研修にて周知し、カリキュラム・マネジメントの視点として取り入れた。今後も継続し、次年度のカリキュラムに反映する。

昨年度までの道徳部の研究で、「D 主として生命や自然、崇高なものとかかわりに関すること」については、光輝(かがやき)単元にかかわらせにくいという点が明らかになっていた。そこで、本年度は、D領域を年間の光輝(かがやき)単元のどこかに位置付け、アンケート調査だけでなく、子どもの変容を行動観察によって見取り、さらなる検証をすることとした(表4)。その際、肯定的な評価の少ない子どもを抽出児として設定し、変容を見取った。以下、子どもの変容の見取りである。

表4 R4前期「光輝(かがやき)」単元に関連深い道徳の内容項目

学年	関連の深い内容項目
1	C14 よりよい学校生活、集団生活の充実
2	D18 自然愛護
3	C16 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度
4	A4 個性の伸長
5	B10 友情、信頼
6	D22 ほこりある生き方
7	C15 よりよい学校生活、集団生活の充実
8	D22 よりよく生きる喜び
9	D22 よりよく生きる喜び B11 相互理解・寛容

【9年生：D-22 よりよく生きる喜びとかかわりが深い単元「共に生きる」】

道徳

- B児は、単元前の野外炊飯PART2の場面で、昨年に続いて実行委員でもあり、全体を見て自分から仲間のために行動することを大切にしたいと考えていた。単元後には、「『共に生きる』とは」を考える活動で、新聞記事の環境問題(野菜で作ったエコな食器の話題)へも視野を広げて考えるなど、他者を尊重する生き方について深く考えようとしていた。また「班の人と話して地域のボランティアなど身近なことからできることを広げていけたらと考えが変わった。」と振り返りにも記述していた。B児に変容の理由について話を聞くと、「単元『共に生きる』では、色々な教科の時間に学んだことを繋げることができていて良いと思う。特に心に残ったのは、企業研究の場面で、たくさんの情報を自分たちのために話して下さり、いきいきと語って下さる方に接して、自分もこんな人になりたいと感銘を受けた。自分だったら、あんな風に話せる大人になれない気がする。それくらい印象的だった。また、共に生きるという視点で考えたときに、実行委員さんが自分たちのために一生懸命考えてくれている姿を見て仲間がいることは幸せなんだと実感できた。」と答え、道徳的实践意欲が高いことも見取れ、仲間が実行委員としてみんなのために行動している姿に、刺激を受けて自分自身も努力したいと考えた。
- 新領域「光輝(かがやき)」では、特に低学年で、子どもたちの思いや願いから単元が構成されているため、全部の内容項目を光輝(かがやき)単元に組み込むことが難しい場合も出てくる。全ての内容項目を含むために、どのようなカリキュラム・デザインの視点が求められるかという点について、今後検討していく。

また、特別活動では、昨年度と同様、教師が特別活動の3つの視点「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」をもち、子どもたちの変容を見取っていくこととした。以下、子どもの変容の見取りである。

特別活動

【2年生】

- 2年生C児は、単元前には「自分はこうしたい。」という思いを、グループの友達に押し付けてしまう姿や、友達の気持ちを考えずに発言する姿がしばしば見られた。しかし、「集まれ三原っ子の森」の単元後には、自分の思いをストレートに友達に伝えるのではなく、友達がやりたいことを聞いた上で、友達にやってほしいことや協力してほしいことを伝えることができるようになった。自分の思いだけで、好きなように博物館を作るのではなく、友達の意見も取り入れながら博物館を作る作業を進めることができた。
- 単元の中で考えたことを実践したり行動に移したりできる子どももいるが、考えの変容(みんなの意見も聞きながら決めていく等)はあるものの、すぐに実践、行動に表れない子どももいた。一単元での変容だけでなく、長期的な視点で変容を見取っていく必要がある。

アンケート調査と子どもの変容の見取りを分析すると、「光輝(かがやき)」に道徳・特別活動を包摂することで、道徳的实践意欲がより高まったり、特別活動の3つの視点をもって行動したりすることができるようになり、より効果が高まること明らかとなった。



## (エ)「光輝(かがやき)」と各教科の1/4を関連付けたことによる効果

保育・教科プロジェクトでは、各学年の「光輝(かがやき)」の実践をもとに、「光輝(かがやき)」と各教科を関連付けたことによる効果について、各教科の視点で特徴的なものを抽出した。表5は、その結果の一部抜粋である。

教員が記入した分析シートの結果から、各期によって関連付けの方法に多少の違いは見られるものの、概ねの教科において「光輝(かがやき)」と内容面や方法面で関連付けられることがわかった。教科の特徴に応じて、内容知としての

かかわり、方法知としてのかかわり、またはその両方の視点をもって進めていくことで、効果的な活用が図られるという方向性が明らかとなった。また、各教科で共通して見られる特徴として、「光輝(かがやき)」と上限1/4の各教科と関連させることで、学習に対する必要感、切実感がもてる授業実践を行うことができ、カリキュラム・マネジメントによって、その教科の学習に取り組むのに効果的なタイミングがあるという点が挙げられた。教科単独ではなく「光輝(かがやき)」と関連付けることで、じっくりと学習に取り組んだり、失敗を許容しながら繰り返し学習を行ったりでき、レジリエンスを身に付けると共に、より主体的に学ぶ意欲をもって学習することができた。

表5 「光輝(かがやき) アンケートの肯定的回答率の推移(一部抜粋)

教科	「光輝(かがやき)」と教科の関連の検証 ○検証済 △未検証		「光輝(かがやき)」と教科1/4を関連付けたことによる 各教科の特徴的な効果
	学年	検証状況	
国語	幼小接続期	○	国語科で身に付けた言葉による見方・考え方を、「光輝(かがやき)」において活用することで、学んだことを国語科だけでなくとどめることなく、他教科や日常生活にも活用しようとする態度を涵養することができている。さらに、「光輝(かがやき)」において言葉による見方・考え方を活用することを通して、子どもが、言葉による見方・考え方を実践的に鍛えたり、言葉による見方・考え方を高める必要性を自覚したりすることで、国語科における学習への好影響が生まれる。【光→教】
	転換期	○	
	小中接続期	○	
	義務教育完成期	○	
社会	転換期	○	「光輝(かがやき)」の学習と社会科で身に付けた見方・考え方を関連付けながら、学習の舞台が、自分の身の回りから地域へ、更に国家(財政)へとといった視点の広がりが見られる。地域の人・伝統・歴史にも着目するとともに、地域の課題をより切実感をもって解決していこうという思いを育むことができる。また、グローバルな視点に立った市民性の育成、人間関係性構築にともなう共感能力、相手の価値尊重の態度などを育むことにもつながる。【光→教】
	小中接続期	○	
	義務教育完成期	○	
算数・数学	幼小接続期	○	算数・数学科では、日常の事象を問題のスタートとして、算数・数学の問題としてとらえ直し、問題の解決ならびに、内容を数学的に深めていくことが求められる。さらに、算数・数学で求めた解を日常に戻して検討することも求められる。そのため「光輝(かがやき)」の授業の中で生じた問題を解決するために算数・数学の問題として扱うという流れの授業が構成しやすいことは強みである。この流れで区分を問わずに一貫して授業を行うことで、自分が数で表すよさに気付くことから始まり、最終的には、数を用いて他者へ提示することや他者との検討・議論を行うといった個人から他者へ開かれた学びとなる。その結果、数的に表現・処理する事のよさを実感する場面や粘り強く考えていく態度の育成につながると考える。【光→教】
	転換期	○	
	小中接続期	△	
	義務教育完成期	○	
理科	転換期	△	理科で大切にしている自然を愛する心情や主体的な問題解決に着目すると、実際に生物に触れながら飼育、観察することや問題解決の手続きを踏み、観察・実験を行うことで、生物の命の唯一性に気付く、大事に育てようとする人間味あふれる豊かな感覚を養ったり、問題解決のプロセスを身に付けたりしていく。理科は「光輝(かがやき)」においてhidden curriculum(潜在的カリキュラム)という役割を果たし、探究的な学習のプロセスや道徳性の育成に関連付けていくと考える。【光→教】
	小中接続期	○	
	義務教育完成期	△	

## ③実施の効果

### (ア)園児・児童・生徒への効果

子どもへの効果を明らかにするために、「光輝(かがやき)アンケート」を1年生から9年生に行った。その結果を表6に示す。そして、アンケートの量的評価を、具体的な子どもの姿と照らし合わせて、各学年区分で質的な分析を行った。

取り上げた量的評価とそれに応じた特徴的な手だてと子どもの変容について、表7から表10に子どもへの効果として示す。

表6 「光輝(かがやき) アンケートの肯定的回答率の推移

		H30	H31/R1	R2	R3	R4(10月)
横断的な知識	小学校	87.3	80.8	74.0	88.3	85.4
	中学校	79.9	79.0	78.7	84.5	79.3
	全体	84.4	80.1	75.8	86.8	83.0
レジリエンス	小学校	87.9	87.7	79.2	82.3	89.6
	中学校	86.1	78.0	79.5	83.3	83.8
	全体	87.2	84.4	79.3	82.7	87.3
躍動する感性	小学校	79.5	84.4	80.1	88.7	88.6
	中学校	72.9	71.8	73.0	89.2	77.5
	全体	76.9	79.7	77.5	88.9	84.2

※H30～R3までの結果は3月末の結果

※R4は10月に実施した結果を記載している。

表7：幼小接続期部会における子どもの変容

躍動する感性	幼稚園の年中では、子どもの感じたことを大切に、一人一人の発想や考え方を認めて尊重していくことで、自分なりの発想や「もっとやってみよう」という意欲が膨らんだ。また、遊びを友達に紹介する時間を設けることで、色々な遊び方に触れて「面白そう」と興味・関心が広がり、友達の遊びに対して「自分もやってみよう」という思いや「こうしたらもっといいかも」といったアイデアが生まれ、自らやってみようとする姿が見られた。
レジリエンス	幼稚園年長では、遊びの中で、困ったことが起きた時に、友達と一緒に解決・実現のための方法を考える場を設定した。そのことで、一人では解決できないことも、友達と考えを出し合いながら粘り強く試行錯誤していきこうとする意欲につながっていった。また、目的を実現するまで継続的に取り組める環境構成を行った。お化け屋敷づくりでは、保育室の隣の部屋をお化け屋敷として維持したことで、これまでの工夫にさらに友達と一緒に考えたことを付け加えながら粘り強く取り組む姿が見られていった。
横断的な知識	アンケート結果では88.3%から85.4%へと3ポイントほど下がったが、2年生「あつまれ!2年生の森!」の学習では、鳥の巣箱を作る際に、初めは既存の知識を総動員して不格好ながらもなんとか巣箱を完成させることができた。その後、算数科で長方形や正方形の特徴について学習した後は、そこで学んだ知識を生かし、よりよい巣箱をつくるために、板と板がピタッと合わさるように、長方形や正方形をかき、それらを使って作成する姿が見られた。

表 8：転換期部会における子どもの変容

躍動する感性	アンケート結果では 88.6%という9割に迫る高い肯定的評価であった。4年生は、「ペアさんを HAPPY にしたい」という子どもの思いをもとに単元をスタートした。単元のゴールを「ペアさんの笑顔」とすることで目的が明確になり、相手意識をもって意欲的に活動する中で、自ら学ぼうとする姿勢を育むことができた。また、「ペアさんの笑顔」という目に見える成果があったため、子どもが達成感を味わうことができ、協働する良さや他者を思う価値に気付くことにもつながった。
レジリエンス	アンケート結果では 82.3%から 89.6%へと7ポイント以上高まった。4年生は、コロナ禍における異校種交流を実現させるために、試行錯誤しながら企画を提案し、実行した。活動において、自分の力だけでは乗り越えられない困難にぶつかったときに、お互いの意見や思いを伝え合い、自分の長所と友達の長所を生かし合うことで乗り越えることができ、達成感を得ていた。自分と異なる価値観に触れ、よりよい関係を築いた経験が、他者との協働への意欲になり、転換期の自己肯定感の低下や人間関係のつまづきという発達課題を乗り越えることにつながった。
横断的な知識	3年生は、主に社会科の地域学習と関連させたプロジェクトを展開した。アンケート結果では 88.3%より3ポイントほど肯定的評価は下がったものの、社会科の学習では祭りのもつ多様な意味を追究し、「光輝（かがやき）」で出会った地域の人々の語りを読み解き価値に迫るような手立てを打った結果、子どもは、やっさ祭りのもつ多様な意味に迫ることができた。また「光輝（かがやき）」の学習において、「やっさ祭りの歴史について知らせたい」という思いを抱くなど、教科の学びを生かしている子どもの姿が見られた。

表 9：小中接続期部会における子どもの変容

躍動する感性	6年生は、「平和」を大テーマに1年間の「光輝（かがやき）」を構成した。当初、「平和」とは何かと問われて「戦争がないこと」と多くの子どもが回答していたが、様々なプロジェクトを立ちあげて活動していく中で、身近な人の安心・安全な暮らしが平和であること、さらに見えない誰かの今よりも豊かな暮らしが平和につながることを視野を広げて考えられるようになった。また、平和は先人の働きによって築き上げられてきたものであることや、自らの行動によって作り出すことに気付いた。アンケートでは 88.6%の高い肯定的評価となっている。
レジリエンス	5年生は、「安心安全」をテーマにして学年全体でのプロジェクトを展開した。4月当初、子どもたちが安心させたい相手はペア学年の1年生であった。1年生が安心して学校生活を送ることができるように、5年生としてできることを考え、企画実行した。活動の過程で、「危険な行動にははっきりと指摘すべきこともある」や「グループ全員が楽しめる活動にするにはどうしたらよいか」など、悩む場面がみられた。話し合い活動を通してお互いの思いに気付くことで、5年生同士が折り合いをつけて取り組む必要があることに気付き、試行錯誤しながら改善案を企画し交流に生かすことができた。肯定的評価の割合は、82.3%より 89.6%に上昇している。
横断的な知識	アンケート結果では、88.3%より5ポイントほど肯定的評価は下がったが、7年生では、光輝探究学習において各教科で身につけた知識・技能を活用できるよう授業改善を図った。例えば、国語科で「複数の情報を関連付けて考えをまとめる」方法を学び、探究学習において集めた情報を関連づけて考えをまとめたり、英語科では、言語文化を学習するために、語源について英語と日本語の特徴を比較する中で、日本語の語源における近隣諸国からの影響を社会科での学習内容と関連付けてまとめたりした。

表 10：義務教育完成期部会における子どもの変容

躍動する感性	アンケートでは、肯定的評価が 88.3%より12ポイント近く下がった。そこで、8年生では「自分の良いところに気付き、将来の夢や目標を持っている」という項目を伸ばさせる必要があると考えた。個人探究学習において課題設定に取り組むにあたって、様々な角度から自己を分析する活動や探究のゴールイメージをとらえさせることを行った。そうすることで、探究学習に対する不安が解消し、自分と向き合う中で自己肯定感も育まれていった。
レジリエンス	アンケート結果では、83.3%から 83.8%へわずかに肯定的評価が上昇した。9年生では「学級みんなで話し合って決めたことなどに協力して取り組みうれしかったことがある。」というコラボレーションする力に関連する項目で伸びが見られた。これは、光輝（かがやき）の授業を始め、その中で行われるさまざまな行事の実行委員会のメンバーが連携・協力を図りながら、皆で力を合わせて成功させようとする思いが醸成された影響と考えられる。
横断的な知識	アンケートによる肯定的評価は、84.5%より5ポイントほど下がった。そこで、9年生では、教員がノウハウを持ち寄って教科横断的な学習の機会（単元「共に生きる」）をもてるように、カリキュラム・マネジメントを行い、単元計画の改善を図った。また、子どもたちが主体となって取り組む三原市企業研究を通して、地域の人とのつながりが深められ、職業観・勤労観の涵養と共に社会貢献や社会参画の視点をもてるように指導を工夫した。

また、全国学力・学習状況調査の結果を見ていくと、以下の質問項目についての肯定的な回答の割合が、全国平均と比べて顕著に高かった。（小学校・中学校合算）

<p>①「総合的な学習の時間」では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。【自ら学ぼうとする姿勢との関連】（全国平均+9.2%）</p> <p>②学級の友達/生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか。【コラボレーションする力との関連】（全国平均+14.5%）</p>
---

「光輝（かがやき）」での学習を通して、自ら課題を立てて解決していこうとする取組や、仲間と協力して課題を解決していく経験を積み重ねた結果であると言える。また、卒業生 80 名を対象に、アンケート調査を行った（回収率 35%）。その結果、回答した卒業生のうち 89.7%が「光輝（かがやき）」を通じて多くのことを学べたと思う」という質問項目に対して、肯定的に回答している。さらに、「光輝（かがやき）」で学んだことについて具体的に記述させたところ、「根拠の重要性」「データの活用方法」、「研究に説得力をもたせる方法」、などの考え方や学びに向かう姿勢などを挙げる卒業生が多く存在した。

高等学校の学習との接続に関して、「高等学校の中で、中学校の「光輝（かがやき）」の授業で身に付けた力が活用されていると感じる場面を具体的に教えてください。」という質問をしたところ、「SDGs に関する学習」や「大学に関する調べ学習」などを挙げる卒業生が複数存在した。加えて、高等学校での探究学習において活用できていると回答した卒業生が複数存在したことから、「光輝（かがやき）」で



の学びは、高等学校でも活用されるということが明らかとなった。

### (イ) 教師への効果

「光輝 (かがやき)」を実践することが教師にどのような効果をもつのか、学校園の教職員を対象にアンケート調査を実施し、22名が回答した(幼稚園3名、小学校10名、中学校9名)。アンケート項目は、「光輝の実践に取り組む中で何か変わったことはあるか」「そう感じる理由」「光輝の実践に取り組む中で変わったと思う同僚の名前」「同僚に関して、何が変わったのか」「変わった理由は何だと考えられるか」といったものであった。このような項目を設定したのは、研究開発に取り組む中で教師がどのような影響を受けているのかを、自己評価・他者評価していこうという目的があったためである。

自己評価にかかわって、多く教職員が挙げたのは「教育観」にかかわる内容である。幼稚園では、3名中2名が「子どもの見取り」「子ども理解」という言葉を用いて自己の変容を表現している。小学校では、「子どもの思いに寄り添った単元構成」の大切さを述べる教職員が多数存在した。10名中7名が「子どもの思い」という言葉を用いて、単元や活動を設定するようになったと述べている。中学校で9名中6名の教職員が述べたのは、「つながり」という言葉であった。「教科間での学びのつながり(9名中4名)」や「教科と日常生活での学びのつながり(9名中2名)」を意識するようになったという回答であった。他者評価については、22件の回答の中で、15名の教職員の名前が挙げた。最も多く名前の挙げたA教諭は、幼小接続期部会に所属する小学校教諭であった。A教諭は3名の教職員に「変わった」と評価された。その理由として、「幼小接続期部会で、実践事例のカンファレンスを行ったり、互いの保育・授業を参観し合ったりする中で、互いの教育や援助について理解し合えた」ことによって、「子どもとのかかわりや、手立ての仕方」についての変容がみられたと評価された。今後は、自己評価と他者評価の結果を、さらに教職員で共有し合うことで、研究開発によって得られる教師としての効果を明らかにし、澁瀬と研究に取り組むことができるようにする。

### (ウ) 保護者等への効果

「光輝 (かがやき)」の授業を公開する「光輝 (かがやき) 参観日」の後に保護者を対象として新領域「光輝 (かがやき)」及び「光輝 (かがやき) 視点の保育」に関する意識調査を実施した。目的は、子どもが学校で学んでいることと、実生活での実態のずれを検証するためと、外部(保護者)への発信状況を検証するためである。内容は、以下の表11に記載している7項目である。この項目は、保護者の本研究への意識や、「3つの次元の基礎となる資質・能力」が保育・授業の中で子どもの姿にどの程度現れているか、また、保育・授業以外での子どもの姿にどの程度現れているかを検証するものである。回答形式は4件法(4=あてはまる、3=ややあてはまる、2=あまりあてはまらない、1=あてはまらない)とし、その平均値によって効果を検証した。質問項目⑤～⑦は、保育・授業参観をもとに回答されたものである。また、感想等の自由記述欄も設けた。

表11によると、どの項目も年度によって数値に増減があるものの、すべての項目で3点以上の高い平均値を記録している。特に、質問項目⑥(「光輝 (かがやき) 視点の保育」, 「光輝 (かがやき)」の授業における子どもの姿), 質問項目⑦(「光輝 (かがやき) 視点の保育」, 「光輝 (かがやき)」の授業の魅力)はどの年度も平均3.5を上回っており、大きく成果を上げている。これは、「光輝 (かがやき) 視点の保育」や「光輝 (かがやき)」の授業を参観された保護者が、子どもの姿からその保育や授業に教育的価値を見出し、肯定的に評価して下さった結果と言える。一方で自由記述欄には、「まだ『やらされている感』があり、家庭では子どもに自主性は見られません。」「積極的に参加していない子どもも参加出来るように声かけをしていただきたい。」といった意見もあった。協働的な学びの中での個別最適な学びに向けた手立てを充実させる必要性についてのご指摘であると受け止め、授業改善を図るとともに、その取組を積極的に発信し、保護者への理解を促していきたい。それが、個別最適な指導方法についての公立校や他校園への提案にもつながると考えている。

表11 回答平均値(括弧内は幼稚園の質問項目)

	質問項目	R1	R3	R4
①	「光輝 (かがやき)」の学習に興味がある。	3.52	3.57	3.47
②	「光輝 (かがやき)」の学習で、子どもたちは、よりよいものを求めて、周囲の事象や人々に興味をもち、積極的にかかわろうとする姿が増えてきていると感じる。	3.35	3.46	3.26
③	「光輝 (かがやき) 視点の保育」で子どもたちが、今まで経験したことを活かして、遊びや生活に取り入れるようになってきていると感じる。	3.22	3.39	3.29
④	「光輝 (かがやき)」の学習で、子どもたちは授業で学んだことを実生活でも積極的に活用している姿が増えていると感じる。(「光輝 (かがやき) 視点の保育」で子どもたちが、身の回りの環境に興味をもち、自分からかかわろうとするようになってきていると感じる。)	3.23	3.33	3.27
⑤-1	「光輝 (かがやき)」で、よりよいものを求めて、周囲の事象や人々に興味をもち、積極的に関わろうとすることをめざす子どもの姿が学習で見られた。(「光輝 (かがやき) 視点の保育」の中で、身の回りの環境に興味をもち、自分からかかわろうとするようになる姿が見られた。)		3.51	3.26
⑤-2	「光輝 (かがやき)」で、最後まで諦めずに挑戦することをめざす子どもの姿が学習で見られた。(「光輝 (かがやき) 視点の保育」の中で、子どもたちが、したいことを諦めずにやってみようとするようになる姿が見られた。)	3.40	3.56	3.29
⑤-3	「光輝 (かがやき)」で、授業で学んだことを実生活でも積極的に活用しようとしている姿が見られた。(「光輝 (かがやき) 視点の保育」の中で、子どもたちが、今まで経験したことを活かして、遊びや生活に取り入れるようになる姿が見られた。)		3.42	3.24
⑥	「光輝 (かがやき)」の学習で子どもたちは、いきいきと活動していた。(「光輝 (かがやき) 視点の保育」で子どもたちは、いきいきと活動していた。)	3.55	3.72	3.61
⑦	また、「光輝 (かがやき)」の学習を見てみたい。(また、「光輝 (かがやき) 視点の保育」を見てみたい。)	3.53	3.68	3.56

※質問項目⑤は、令和元年度は『「光輝 (かがやき)」でめざす子どもの姿が学習で見られた。(「光輝 (かがやき) 視点の保育」の中でめざす子どもの姿が見られた。』という質問でアンケートを実施した。

また、保護者からは研究開発について紹介する「研究開発だより」への感想として以下のようなコメントが寄せられている。

- ・光輝の授業のおかげで色々な視点で考えることができる力がついてきていると思います。また研究開発だよりで取組の様子が分かり家庭でも話題にできます。
- ・漠然と不安な未来を予想して焦る親を横目に、子どもたちが新しい事をどんどん吸収していく姿を見ることが出来ました。
- ・探究学習では、自分で選んだテーマを自主的にいろんな方法を駆使して、考えを深め、まとめていく姿がとても遅く思えました。

## (2) 実施上の問題点と今後の課題

### ①研究開発の汎用性の観点から

研究開発課題の設定に関しては、「他の学校においても実施できる汎用性の確保に特に留意し、個々の環境条件の下で得られた結論について、一般化がどの程度までできるかを明確にすると共に、他の学校への普及や展開が期待できる内容にすること」（「令和5年度研究開発学校の研究開発課題の設定について」文部科学省、2022）と示されており、汎用性について留意しなければならない。汎用性をもたせるために、特に小学校と中学校で取り組んだのは、総合的な学習の時間との比較である。総合的な時間での取組と本学校園の新領域「光輝（かがやき）」との違いは何かだけでなく、新領域「光輝（かがやき）」の成果をもとにして、総合的な学習の時間の充実に努められるような方法について、研究成果を発信していけるようにした。

表12は、研究開発を開始する以前と令和3年度の研究会アンケートを比較した結果である。これを見ると、研究会に参加された方が、それぞれの所属学校園に、本学校園での取組を持ち帰り、実際に活用しようとしていることが分かる。これは現在集計中の令和4年度の結果ではさらに増える傾向にある（研究会が12月3日開催、執筆時45件の回答中27件；60%）。以上のことから、研究開発の初期段階から他校園への汎用性を重要視して外部発信することが必要であった。そうすることで、研究成果を広く活用していただくことが可能だったのではないかと考える。

表12 「本学校園の取組を参考に、自校等で実施したいこと」に関する回答比較

年度	アンケート回収数	実施したいと答えた数	割合	増減
H29年度	177件	20件	11.3%	
R3年度	166件	41件	24.7%	+13.4%

### ②全校体制で取り組む研究開発の在り方について

教職員アンケートによると、令和3年度までの本学校園の研究体制では、「キャップ」という各部署のリーダーに業務が偏るとともに、その人のマンパワーに頼らざるを得ない部分などがあった。これは、学校園全体で研究開発に取り組むという観点から早急に改善すべき課題であった。そこで令和4年度の取組からは、一人一役と位置付け、全員に役割を振り、一人一人が研究に参画できる体制を整えとともに、一人一人が研究の発信者でもあるという意識を高めるように研究を推進してきた。それによって、全員が研究に主体的に参画するような体制が整いつつある。また、本学校園では幼・小・中全体で研究について会議する「全体研究部会」を伝統的に位置付けてきたが、各校種での研修会はもちろん、「新任者」といった、対象者を限定した研修などを活用して、全員が研究に向かうマインドセットを構築するようにした。これは今後も継続したい。

### ③カリキュラム上の課題

本研究開発の中核をなす、新領域「光輝（かがやき）」においては、教科や領域での学びが包括的に配置されている。それにより、例えば、道徳や特別活動の学びにおいて実践的な場面を設定することができたり、教科の学びを活用・応用して学んだりすることができる。

ここで、注目したいところは、特別の教科道徳の学びである。本研究開発において、新領域「光輝（かがやき）」の中に道徳を包摂することによって、道徳的判断力だけでなく、道徳の実践意欲・行動まで新領域「光輝（かがやき）」の中で育成をすることが可能となった。しかし、本来、自己を見つめたりするような自己内対話などにかかる時間が活動に追いやられてしまう部分には、授業者として十分注意しなければならない。また、規範意識などは、じっくりと時間をかけて向き合う必要があることも、実践を通して明らかとなってきた。中央教育審議会答申「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」(文部科学省、2021)の中で、どのような時代であっても変わらず重要な資質・能力が挙げられている。新しい取組にチャレンジする一方で、普遍的に大切にしなければならないことは何なのかといった点を吟味して、カリキュラムをデザイン、マネジメントしていくことが改めて必要であると実践を通して感じている。

### ④今後の研究開発の方向

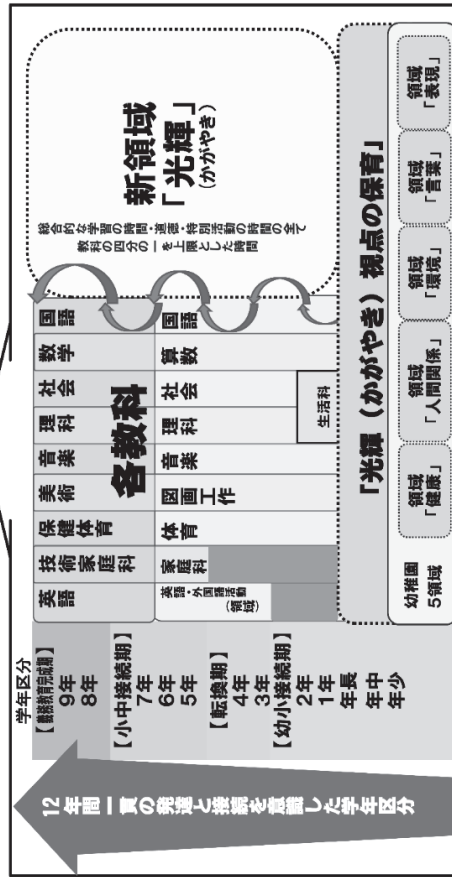
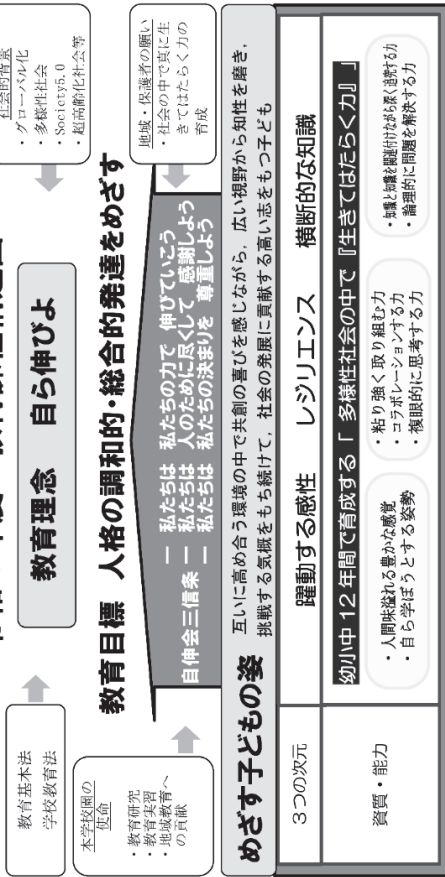
本学校園では、今後も本研究開発での取組を継続実施していく予定である。その際に以下の点について検討し、12年間一貫カリキュラムとしての効果をさらに高めていきたいと考えている。

- |  |
|--|
| <p>①自己を見つめ、自分自身の内面を磨いていく時間を新領域「光輝（かがやき）」の中に確保し、自分も他人も大切にできる心情を今後は一層重視して育成をめざす。</p> <p>②教科横断の方法については、発達段階に応じた取組が求められるため、4つの学年区分の中でも大きく2つに整理し、子どもたちの実態に応じた取組ができるように運用していく。</p> |
|--|

①については、「2.カリキュラム上の課題」でも述べたように特別の教科道徳の強みを生かしたカリキュラム・マネジメントが重要であると考えている。同時に、新領域「光輝（かがやき）」の内容を整理していくことが必要である。例えば、現在は、内容については「創造性、独自性」、「相互依存性、協働・連携・責任性」、「持続可能性、有限性」、「多様性、多文化共生」といった観点で整理をしている。ここに、「自分」という観点が抜けているため、そのような観点を構築しながら自己も大切にできる心情を養えるようにしていきたい。②については、教科横断の形が幼稚園などでは馴染まないといった実態を鑑みて、現在の学年区分を大枠でくくる、前期7年・後期5年という枠組みを設定することも視野に入れている。その中で、前期では経験をもとにした「知識を関連付ける力」という横断性を意識し、後期では、「既存の内容知」と「既存の方法知」を関連付けながら自ら学べるような力をめざして研究を進めていきたい。



## 令和4年度 教育課程構造図



### <教育課程の特徴>

#### 12年間一貫教育カリキュラム

教育理念「自ら伸びよ」や自伸会信条で貫かれた全教育課程における12年間一貫カリキュラムにおいて、  
多様性社会に適応するために必要な3つの次元の基礎となる資質・能力等を育成

総合的な学習の時間、道徳、特別活動の時間及び教科の4分の1を上限とした時間を包摂し、「光輝（かがやき）」  
総合的な学習の時間と道徳、特別活動の時間及び教科の4分の1を上限とした時間を包摂し、3つの次元の基礎となる  
資質・能力等の体系的な育成のための単元を設計し、その中で体系的な学習を創造

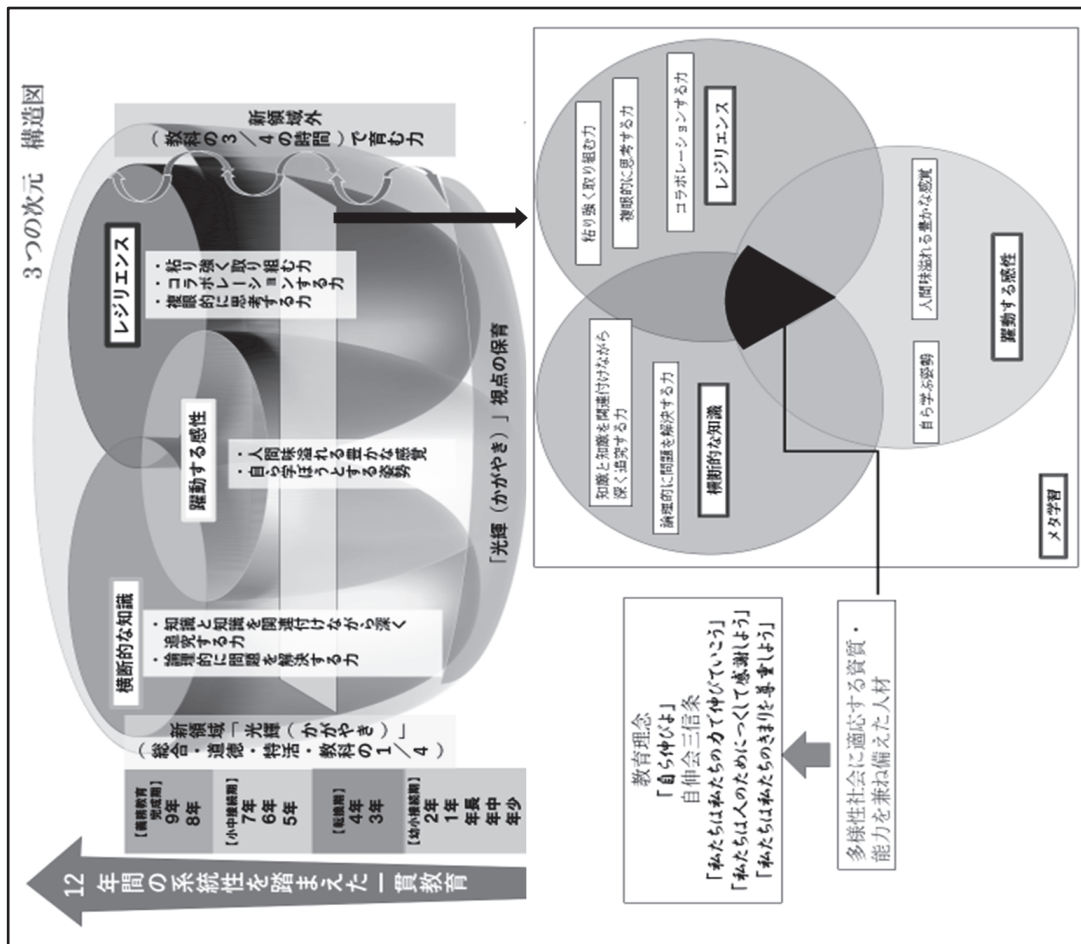
【光輝（かがやき）視点の保育】

幼稚園5領域をふまえ、3つの次元の基礎となる資質・能力等を育成。そのための環境構成と援助の明確化  
幼稚園と小学校の接続カリキュラムの構築

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に視点を当てた

3つの次元の基礎となる資質・能力を育て、三領域幼小接続カリキュラムを開発

【新領域「光輝（かがやき）」と関連して行う「保育・授業実践」各教科の「見方・考え方」を働かせた授業実践



3つの次元の構造図と本学校の教育理念との関係



### 広島大学附属三原幼稚園 教育課程表（令和4年度）

「光輝（かがやき）視点の保育」	年少 （3歳児） 1期～4期	幼稚園教育要領に定められた5つの領域をもとに、日々の生活や遊びの中で新領域の視点にかかわる活動を実践し、3つの次元の基礎となる資質・能力の育成に取り組む。
	年中 （4歳児） 5期～8期	
	年長 （5歳児） 9期～13期	

### 広島大学附属三原小学校 教育課程表（令和4年度）

	各教科の授業時数											英語	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	新領域 「光輝（かがやき）」	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	道徳							
第1学年	306	-	136	-	102	68	68	-	102	- [-34]	-	-	- [-34]	102 [+102]	884 [+34]		
第2学年	315	-	175	-	105	70	70	-	105	- [-35]	-	-	- [-35]	105 [+105]	945 [+35]		
第3学年	245	70	175	90	-	60	60	-	105	- [-35]	35	- [-70]	- [-35]	140 [+140]	980 [±0]		
第4学年	245	90	175	105	-	60	60	-	105	- [-35]	35	- [-70]	- [-35]	140 [+140]	1015 [±0]		
第5学年	175	100	175	105	-	50	50	60	90	- [-35]	70	- [-70]	- [-35]	140 [+140]	1015 [±0]		
第6学年	175	105	175	105	-	50	50	55	90	- [-35]	70	- [-70]	- [-35]	140 [+140]	1015 [±0]		
計	1461	365	1011	405	207	358	358	115	597	- [-209]	210	- [-280]	- [-209]	767 [+767]	5854 [+69]		

小学校においては、全学年で道徳及び特別活動の時数と3～6年で総合的な学習の時間の時数を削減し、新領域「光輝（かがやき）」を設置している。さらに、各教科の4分の1程度を上限に、各教科と新領域「光輝（かがやき）」を関連させて行う。理由は、新領域「光輝（かがやき）」の単元として、行事と教科を関連させた単元や、合科的な単元を実践することで、子どもたちが、教科や領域の枠組みにとらわれず、幅広い視点で物事をとらえ直す機会を授業において設定するためである。また、教科目標や教科の学習内容、学習評価方法の観点から、教科再編に資する知見を見出すことも目的の一つとしているからである。つまり、教育課程表中の各教科の時数は、実際の運営においては、各教科の時数は上記より減少し、一方で、新領域「光輝（かがやき）」の時数は、各教科の時数をも含むことになり更に増加することとなる。したがって、新領域「光輝（かがやき）」ならびに各教科の実際の時数については、正確な時数を現段階では下記教育課程表には表記していない（今後の研究推進を踏まえて、適切な時数を決定していくものとする）。

広島大学附属三原中学校 教育課程表（令和4年度）

	各教科の授業時数										総合的な学習の時間	特別活動	新領域 「光輝（かがやき）」	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	英語	道徳				
第7学年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	- [-35]	- [-50]	- [-35]	<b>120</b> [+120]	1015 [±0]
第8学年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	- [-35]	- [-70]	- [-35]	<b>140</b> [+140]	1015 [±0]
第9学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	- [-35]	- [-70]	- [-35]	<b>140</b> [+140]	1015 [±0]
計	385	350	385	385	115	115	315	175	420	- [-105]	- [-190]	- [-105]	<b>400</b> [+400]	3045 [±0]

中学校においても小学校と同様に教育課程を編成している。なお、総合的な学習の時間については、中学校1年生にあたる第7学年から、中学校3年生にあたる第9学年の全ての学年で削減し、新領域「光輝（かがやき）」に当てている。

## 学校等の概要

### 1 学校名, 校長名

広島大学附属三原幼稚園 (ヒロシマダイガクフゾクミハラヨウチエン)

広島大学附属三原小学校 (ヒロシマダイガクフゾクミハラショウガッコウ)

広島大学附属三原中学校 (ヒロシマダイガクフゾクミハラチュウガッコウ)

校長 柳澤 浩哉 (ヤナギサワヒロヤ)

### 2 所在地, 電話番号, FAX番号

所在地 広島県三原市館町2-6-1

電話番号 (0848) 62-4884

FAX番号 (0848) 60-0121

### 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数, 学級数

(幼稚園の場合)

年少		年中		年長		計	
幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数
14	1	27	1	28	1	69	3

(小学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
61	2	62	2	60	2	63	2	63	2	60	2	369	12

(中学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
79	2	80	2	80	2	239	6

### 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	3				29		3		1	13
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
	1	9		60						